

## 河上正秀『キルケゴールの実存解釈：自己と他者』書評

須藤 孝也

本書は、著者が1999年以降に発表した諸論文を取めた第I部と第II部（それぞれ4本の論文から成る）、及び補遺（1973年の論文「沈黙と言語」と1979年の論文「仮名と著作：沈黙の語り出すもの」から成る）によって構成されている。

\*

第I部が主として考察の対象とするのは、キルケゴール以後の哲学者たちがキルケゴールをいかに理解し、評価し、批判してきたのか、その歴史である。大きなまとまりとしてあるのは、1920年代から30年代にかけての実存主義者たちによる議論と、それを受ける形で70年代から80年代に展開された、レヴィナスとデリダによる議論である。

筆者は、まず、ハイデガーやサルトル、レヴィナスらによる他者関係ないし倫理をめぐる一連の議論の起点をフッサールに見出す。「間主観性」の概念によってよく知られているように、フッサールは主体と主体の「間」に注目した。そこでは近代哲学の中核に巣くう独我論からの脱却が図られ、他者が果たす役割が積極的に注目されたのだが、その他者はなお自我によって類推されるもう一つの自我としての他我にとどまった。

他者の他性を捨象するこうした「同」の論理は、主体の還元不可能性を強調するハイデガーにも継承された。ハイデガーのみならず「総じて実存思想にあっては、キルケゴールの実存の意味を、主として実存における「還元不可能性」という意味規定のもとに捉えてきた」（60頁）と筆者は実存主義者たちによるキルケゴール受容を総括する。

だがハイデガーが受容したキルケゴールは、キルケゴールそのものではなかった。実存主義者たちの多くと同様に、彼が、「主体性は真理である」とい

うテーゼに目を奪われ、このテーゼの裏面にあった「主体性は不真理である」というテーゼを受け止め損ねたところに、それはうかがわれる。周知のように、キルケゴールは、「ギリシャ的なもの」と「キリスト教的なもの」を異質なものとした上で、後者の立場に立ったのだが、ハイデガーやニーチェの「英雄主義」はギリシャ的なものであり、そこにずれがあった。倫理に関して言えば、キルケゴールのキリスト教的な個別性の倫理は継承されず、ただ真理に関わるパトスだけが受容されたのである。ハイデガーは、キルケゴールを「哲学的カテゴリー」へと変換して理解することで「カテゴリー・ミステイク」を犯したとするP.J. ハンチントンの指摘を筆者は何度も引用し、大きな賛同を示している。

1928年、レーヴィットは『共同的人間の役割における個人』によって、ハイデガーが非本来的として切り捨てた日常性を復権させた。倫理に関して言えば、ハイデガーの個人は死を引き受けることによって単独化して本来性へと立ち返るのだが、その際に他者との相互性が失われてしまうとレーヴィットは指摘する。「他者の代理を務める」ことができると考えるハイデガーの哲学は、倫理学的に看過しえない重大な問題を抱えているのである。レーヴィットはここで、キルケゴールに他者理解の範型を与えるのが神関係であることを注意深く見て取り、キルケゴールの間接伝達が、人間の相互性を加味する点を高く評価する。だが同時に、キルケゴールの他者との関係がもっぱら精神的なもので、人間の自然性を考慮に入れるには至らなかったことも指摘した。

以上のようなキルケゴールをめぐる議論の積み重ねを受けながら、レヴィナスもまた、ハイデガーと並べてキルケゴールについて論じる。レヴィナスは、他者を代理するハイデガーの本来性の思想のみならず、フッサールの間主観性の思想にも、倫理を乗り越えていくキルケゴールの単独者にも、他者の他性についての認識が見られないと厳しく批判した。それまでは肯定的に受け止められていた「還元不可能な主体」に関する議論は、一転して批判の対象となった。

レヴィナスは、『畏れと戦き』にあるような、倫理に対して宗教を上位に据えるキルケゴールにどうしても賛同することができなかった。「鉄槌をもって」

するニーチェやハイデガーと同様の暴力を生み出す論理が、自己関係することで自己同一性へとあまりこんでいくキェルケゴールの主体にも見出されるとしたのだった。

レヴィナスが、宗教を倫理に対して優越させるのではなく、逆に倫理を宗教に対して優越させるべきだと主張したのに対し、デリダは、両者の順番を入れ替えたところで、議論の構造は変わらないと指摘した。さらに、レヴィナスの「倫理もまた、他者の絶対化という意味で、ほとんど宗教的なものへの方途ではないのか」と述べて、倫理を宗教の位置に据えるレヴィナスの議論それ自体が「否定神学の形式」で語るに止まっていると指摘した。むしろ神的他者が実は人間的他者から派生したものであるかもしれないと考えるデリダは、あくまで倫理を論じたものとして『畏れと戦き』を読んでみせ、私たちが日常生活において、アブラハムと同様に他者に犠牲を強いざるを得ない状況を生きているのだと主張した。

\*

第Ⅱ部では、まずヴィトゲンシュタインによるキェルケゴール受容が取り上げられる。ヴィトゲンシュタインの目にとまったのは、「言語の限界」について考えるキェルケゴールであった。ヴィトゲンシュタインはキェルケゴールを踏まえながら、たとえ言葉を尽くして真理そのものを語ったとしても、それは空語、ないし無意味になってしまうと考えた。ここで筆者は、「おそらくハイデガーの無神論的な存在論的手法には、キェルケゴールの倫理・宗教的次元に属する「逆説」はなじまなかつたし、周知のように、彼はそうした道徳的・倫理学的手法自体を忌避した。その意味ではウィトゲンシュタインこそ、着眼としてはキェルケゴール思想の正統派を任じる資格があったといえる」（145頁）と述べ、ハイデガーのキェルケゴール受容よりもヴィトゲンシュタインのそれを高く評価する。

次に筆者は、田辺元のハイデガー批判に注目する。田辺は仏教徒であったが、同じ宗教者として、ドイツの実存哲学が語る無が、キリスト教徒キェルケゴールが語っている無と異質であることを洞察した。実践や行為、実存への関心をキェルケゴールと共有する田辺は、ハイデガーの実存論が倫理宗教的にはキ

ルケゴールのはるか手前にとどまったことを明確にした。

筆者はまた、『現代の批判』が誤解された経緯にも言及する。20世紀初頭のドイツ人たちは、「現代」の部分だけを読み、キルケゴールを、「現代」を批判して伝統へと立ち返ることを呼びかけるロマン主義者と解した。だがキルケゴールが『文学批評』で実際に提示しているのは、「現代」と「革命時代」が弁証法的な関係にあるということであり、その議論は、一方をよい時代と、他方を悪い時代とするものではなかった。キルケゴールの議論からは、本来性へと飛躍する安易な決断主義のようなものは決して帰結しえないと指摘する。

\*

ハイデガーやサルトル、レヴィナスといった「哲学者」たちのキルケゴール論を見るとき、彼らが多少なりともキルケゴールを誤解していたことがわかる。「キルケゴール研究者」ではない彼らの主たる目的が、キルケゴール研究ではなく、自らの哲学を構築することにあったことからすれば、彼らの読解が不正確なものにとどまったことは蓋然的であったかもしれない。とはいえ、そうした議論の積み重ねが無意味だったわけでは決してない。そこでは、他者の他性の発見を筆頭に、私たちがこれから考えていかなければならない論点も提示された。

筆者は、これからキルケゴールに取り組む者に対し、「単独者のなかで自己完結する倫理性においてではなく、まさに他者との倫理的関係のなかでのみ意味化され、その関係のなかで模索されるしかない問い」（195頁）を引き受け、これに向き合うことを求める。同の体系へと他者を回収することなく、「他性を引き入れることによる非同一の主体のありようが原則的に問われ、キルケゴール思想に関しても他者論的転回の新たな読解」（127頁）を作り上げることが期待される。

受容史をたどるだけであれば、様々な哲学者が受容したキルケゴールがどのようなものであったかということしか見えてこない。キルケゴールが考えたことが実際どういうものであったのかを明らかにするためには、キルケゴールそれ自体に目を向けなければならないことは言うまでもない。とはいえ、現代における自身の実存を忘れて、キルケゴールだけに目を注ぐのは、キルケゴール

思想の主旨に反するようにも思われる。私たちは、キェルケゴールと現代に生きる私たちとを結び合わせる作業にも携わらなければならない。そこでは現代の状況に対する分析も欠かすことができない。キェルケゴール研究者がしばしばキェルケゴール思想の内部に沈潜することに終始する傾向がある以上、本書から私たちが学ぶことができる様々な議論の重要性は、どんなに強調してもしすぎることはない。

筆者は、現代のニヒリズムを克服するために、キェルケゴール思想を役立てうる余地はなお十分にあるとの展望を示している。その一つが、上にも述べた通り、自己のみならず他者の他性をも考慮に入れた倫理を構築することである。これまた筆者が指摘する通り、キェルケゴールにおいてこの他性は、神の他性と関連している。世俗化が進行する現代において、キリスト教信仰に立脚したキェルケゴール思想を活用することはどのような方法によって可能になるのか。アドルノやレヴィナス、デリダといったユダヤ教を背景にした思想家たちが繰り返し広げた議論を振り返った後で、再度現代の私たちはいかにしてキリスト教思想を読み直し役立てていくことができるのか。今後私たちが継続して考え続けていかなければならない重要な論点を、本書は多数含んでいる。